

6月13日	14:50	B.C.着
22日	7:30	アタック隊出発
	9:30	大槍直下
	18:30	A.C.着
23日	10:10	A.C.撤収
	13:45	B.H.着
24日	停	帶
25日	8:20	B.H.発
	15:05	C <sub>1</sub> 着 (300m)
26日	停	帶
27日	6:00	C <sub>1</sub> 出発
	13:45	本峰頂上
28日	9:00	C <sub>1</sub> 撤収
	11:40	B.H.着

### 3 東北朝日岳西面 (昭和44年8月)

四 方 立 夫

(三面川全域溯行)

私達が数年来活動の場として来た「黒部」を離れ、東北へ赴いた理由は、何にも増して「未知」への憧れであった。

北アを離れるに当り、多くの問題点があった。岩場が無い事、雪が少ない事、標高が2000mに満たない事、我々にとって東北は「未知」であるが由に綿密な計画が立てられない事、BC形式の溯行合宿に適した沢が少ないと、等々の問題点が浮び上がって来た。しかし、それらを打破したものは、「探検」の原動力である「未知への憧れ」であり、同時にそこからの展望もあった。そういう夢と抱負を胸に秘め、7月29日出発した。が、大きな災害をもたらした北陸豪雨をもろに受け、8月9日まで濡物とカビの停滞が続いた。その間に沢の下部偵察、荷上げ、ルンゼ溯行等をし、又OB中野氏に入山して載き、やっと翌10日行動開始した。

以下がその記録である。

### 三面川周辺図



◎ 金堀沢（メンバー 川戸秀起・越智修・藤本幸一）

8月10日 雨雲の僅かな切目をついて、13時にB.H.の三面小屋を達ち、何度往復したか判らぬ径を沼倉山へ向かう。

8月11日 7時15分、小相模沢とヒトキノ沢の中間小ルンゼを目指してブッシュを漕ぎ出す。その小ルンゼは、10m以上の大滝を四つ懸け、最後も15m滝となって竹ノ沢本谷に落ちている為、アップザイレンで降りる(11・50)。そこで昼食にした後、目と鼻の先にある相模沢出合まで左岸を小さく巻く。本谷はまだ廊下が続くので、左岸を高巻いて100mも行くと小さなザクに出、そこにツェルトを張る。

8月12日 昨日固定したザイルを頼りに沢芯に下って、全員ワラジを履き7時5分出発。途中右岸には30m二段の滝となってルンゼが落ち、困難な処も無く7時55分、金堀沢～中ノ俣沢の分岐に着く。そこで中ノ俣沢の二名と、互いの健闘を約して別れ、左岸よりに金堀沢に入る。間もなく両岸壁が迫って、5m滝が四つS字状に彎曲しながら白沫を噴き出しており、右岸を巻いて懸垂で下る(8・45)。暫く行くと左折し、上段3m下段4m滝が現われ、その釜の右岸を泳ぎ、バンドのドライバースで落口に出る。徒渉を繰返しゴーロを進むと、二段10m滝が懸かっている。左岸壁に取付いてはみたが結局諦め、右岸ルンゼより巻いて抜ける。何時しか雨が降り出し、寒気が全身を襲って来たので全員雨具を着用する。水量も増えているらしく、徒渉の困難さを感じ出す。10m瀑布は強烈な飛沫を上げて落ち、釜を搖振っている。その右岸を巻くと、次の三段10m滝もやはり渦巻く釜を持っている。今度は空荷で右岸壁をへつった後、シャワークライムで落口に立つ。やがて水量の多い奥小滝沢出合に着く。適當なビバーク地が見当らず、少し手前の右岸尾根上にプラットを作り、ツェルトの中でブスを焚いたが悪寒はげしく、雨具は脱げなかった。

8月13日 7時50分出発。奥小滝沢出合のすぐ先には、ゴルジュにS字状の二段7m滝が懸かっている。右岸を小さく巻いて100mも行くと、緑に染まった瀬があって先の滝まで近寄れない。左岸を大きく巻いて懸垂2ピッチで沢芯に降りる。少し戻って滝を見ると、3m・4m・5m・5mの連瀑だった。間もなく廊下になり、その中の二段9m滝を左岸高巻いた後、昼にする(11・30)。すぐ又、二段9m滝が懸かり、胸まで浸るへつりをしてから直登すると、ゴーロとなっている。快適に飛ばして行き、右手にヒノキノ沢を入れた後、三段17m滝が懸かる。難無く左岸を越えて行くと、左手に二段15m滝となってルンゼが入る。そこから泳ぎ・へつり・徒渉とあらゆる手段を講じて溯っていくと、二段10m滑滝に出る。左岸を直登すると右折し、ほどなく二服に着く(15・15)。

右俣に200m程入ってビバーク。

日記 8

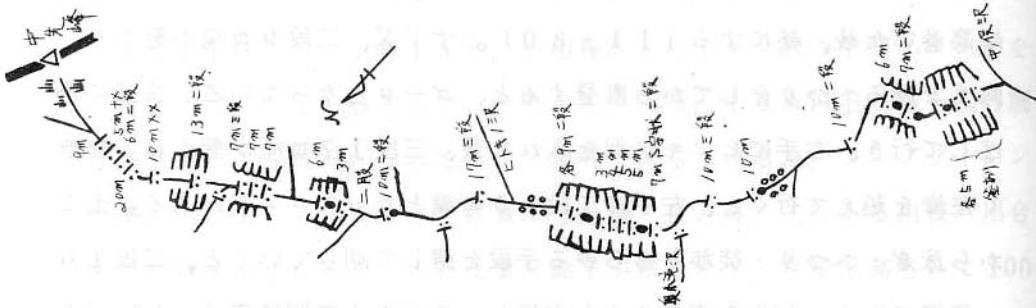
8月14日 夜半に大雨が降って水位が15cm上がっている。7時5分に出発し、ゴーロを行くと下に3m滝が懸かり、右岸を泳いで直登する。すぐ上は釜を持った6m滝が、両岸をハング気味に張り出している為、右岸を巻く。次は壁高40~50mで、底の幅は4mの廊下に、二段13m滝が詰まっている。その左壁のバンドをトラバースして小さく巻く様に通過する。少し行くと、いよいよツメの雰囲気になる。10m滑滝を越すと右折し、続いて10m滑滝は右岸を登り、二段15m滝は左岸を巻き、20m滝は左岸を越えて来ると最後の二俣に着く。その右俣に入ると、やがて伏流し、初め背丈程もあった熊笹も低くなり、ついに稜線の径に出た(14・25)。濃いガスと中ノ俣から吹き上げる烈風の中を、逃げる様に狐穴小屋に避難した。

予備日数も使い、濡れた残りものでのタメシは、涙が出る程のものだった。

8月15日 ガスの中を下山し始める。途中からガスは引き、空

が広がり出した。ぬかるんだ径を下って行くと、沼倉山で昼食を持って来てくれたサポナト隊に迎えられた。

### 金掘沢概念図



8月12日 出合から金堀沢の明るさとは対照的に陰々とし、更に増水で水嵩も多く、先が思いやられる。右岸よりに入谷するとすぐ径10mの滝で二人共へつりに失敗し、早速泳ぐ。そこで左折すると逆三角形の5m滝があり、その釜を泳いで右岸を越す。更に左折し、圧倒的なハングとなって両岸壁が張り出している中を抜け、S字状斜傾距離15m滑滝は右岸を登る。次の2m滝で再度泳ぎ、左岸を越す。（以下滑滝は総て斜傾距離の値とする。）左岸に20m滝となってルンゼが入ると廊下は終る。沢芯が礎礫化してくると、正面に三段の瀑布を望む（630m付近）。まず20m滝は簡単に左岸を直登し、落口で右岸に移る。続く10m滝の落口から、幅3mの大ゴルジュ帶になる。三段目10m滝は細長い釜よりバンドに出、更にアブミー台セットして上段バンドに達したが、ボルトが無くては落口に出られず、やむなく戻る。右岸壁を40mザイルいっぱいに延ばしてブッシュに逃げた。雨足が強まり、小ルンゼ横でツェルトを張る（12・20）。あまりの寒さの為、ホット・ソーダ水なるものを飲んだ。

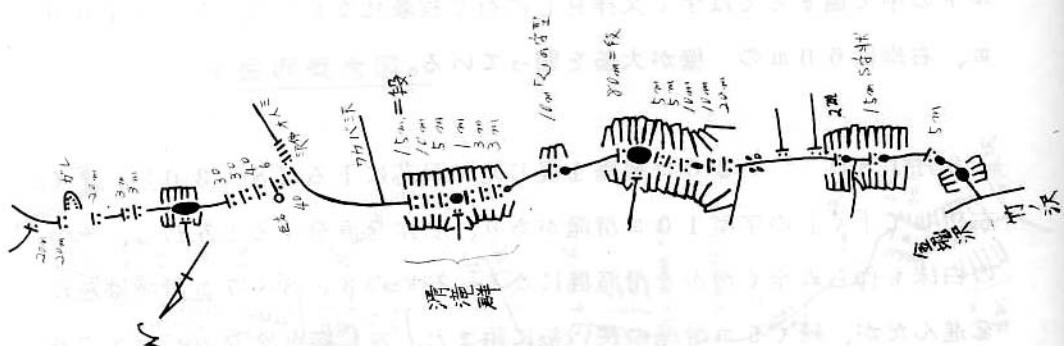
さて本谷は三段の滝の後、二つの5m滝（水量が多く滑滝の様に見えた）を右折しながら奔流し、径30mは猶にある大釜に80m滝が二段で落込む。これもあまりの水量の為、一見直瀑の如く落ち、壯觀を極める。ツェルトの中で温まってはすぐ又拝見しに行く程豪壮なもので、左岸は100m、右岸は60mの壁が大釜を囲っている。

8月13日 20m懸垂を混じえて沢芯に下る（8・30）。すぐ右折して「く」の字型10m滑滝があり、右岸を直登すると左折し、一つの白沫も作らぬ全く滑かな滑滝群になる。初めの3・3・7m滑滝は左岸を進んだが、続く5m滑滝の長い釜に阻まれ、左岸峻涯をワカバ沢まで巻く。その間に10m、二段15m滑滝を続けて持っていた。ワカバ沢出合（10・15）より左岸通しに右曲して行くと、正面に三人オ仲沢が30

度傾斜の階段となって落込む。その出合で本谷は90度左折し、40m瀑布が凄じい飛沫と冷風をあびせてくれる。左岸直登し、続く6m滝は右岸の巨岩の裏を登る。次は右岸へ幅1~1.5mに押しつけられた三段40m滑滝。更に30m、30mと立派な瀑布が続き、いずれも左岸を直登する(11・20)。間もなく入口が碧潭となった廊下になり、左岸の密叢を巻いて行く。本谷は廊下の後3m滝と20m瀑布を二つづつ懸けている。懸垂下降で沢芯に戻るとすぐ二股に着き、左俣本谷は左折して20m滝を懸けている(15・00)。左岸凹角からブッシュ帯に入りピバーク。夜半大雨となる。

8月14日 増水・強風・濃霧と最低のコンディション。ツメまで600m以上あり、まだまだ瀑布の直登を楽しめそうだが、吹きつける雨の中を強行するのは危険と判断し、涙をのんで溯行を断念する。尾根を忠実に辿り、視界ゼロの善六池に出、小休止も取らずに大上戸の泊場まで行く。そこでツェルトを被り、ラーメンを食うとやっと体が温まり、何時しか二人共眠ってしまった。

## 中ノ俣沢概念図

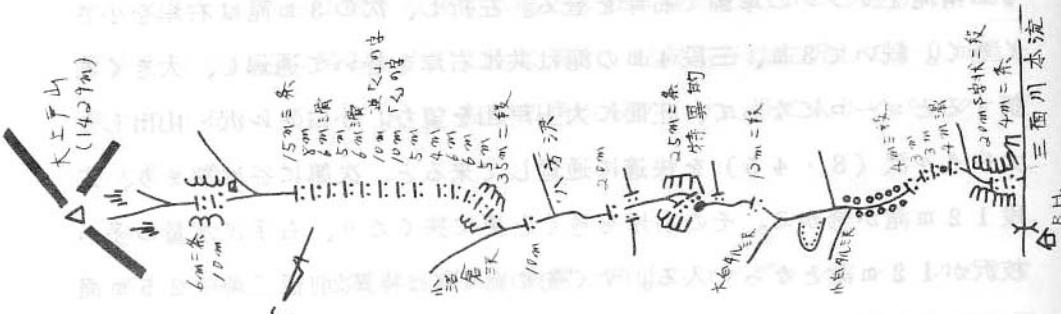


8月11日 本流出合から (6・05) 徒渉、へつりを繰返して行くと、4m二条の滝があり、その左岸を越える。次のS字状二段20m滝は右岸ルンゼより巻いて落口に立ち、右折して右手にルンゼを入れた後、4m滑滝をワラジの摩擦で右岸を登る。左折し、次の3m滝は右岸を小さく巻く。続いて3m、三段4mの滝は共に右岸を巻いて通過し、大きく右折するとゴーロになって、正面に大上戸山を望む。小白タル沢・山出し・大白タル沢 (8・45) を快適に通過して来ると、次第に谷は狭まり、二段12m滝が懸かる。その右岸を巻くと更に狭くなり、右手に水量の多い枝沢が12m滝となって入る。すぐ先の廊下には特異な前後二条の25m滝が懸かり、昼休止を取った後 (9・20~9・45) 右岸ルンゼを高巻くと、両岸から枝沢が滝となって落ちて来る。次の二段20m滝も右岸を巻く。それより河原がS字状に蛇行し、八方沢が入ると10m滝が懸かり、その左岸を巻いて小沼倉沢出合に着く。(11・40)。そこで本谷は右折し、水量は半減した様に感じるが、すぐ廊下となって二段35m滝が待っている。その右岸を高巻くと礎磊化して、傾斜が一段と増し、変化に富んだ滝が矢継早に現れる。三条15m滝を最後に、再びゴーロとなって二股に着く (15・30)。左俣本谷にルートを取り、小さなゴルジュを抜けると広河原になり、少し進んで幕営 (16・00)。

8月12日 6時45分出発。10m滝は右岸ルンゼより巻き、続く6m滝を越せば、ルンゼの様相になり、振返ると黒倉沢全体がよく見える。小滝をチムニークライムで越す様になると、ブッシュに被われ出す。それを抜け、草付から細かいスタンスを捨いながら詰めて行くと、再び草付に変って小尾根に出る。尾根より絡み合ったブッシュをこぐ事20分で大上戸山に出、溯行は終った (9・35)。

以上が第Ⅰ期であり、天気は悪く増水する一方で、全く手口摺られ  
たが、以下の第Ⅱ期は天気も完全に回復し、存分な溯行が出来た。

## 黒倉沢概念図



◎ 以 東 沢 (メンバー 中野力・越智修・山本三郎)

8月16日 竹ノ沢出合から左岸をへつって行くと廊下になり、高巻いてスノバコ沢出合へ降りる。先のスラブで再び左岸を巻くと廃道に出たが、それもスナヤマ沢で消える。再び本流寄りに踏み跡を見つけて進む。同じ事を繰返して行くと、落口がナタ目の様なナタ倉滝が、大きな釜に奔落している。その後、一度沢芯に降りたが、巻き続けて対岸に風倉沢を見てから、ザクに荷を置いた。

参考タイム：竹ノ沢（40分）スノバコ沢（30分）スナヤマ沢（30分）瀧沢（60分）ナタ倉滝（70分）風倉沢

8月17日 廃道を数エ門沢手前まで辿ると消え、沢芯に降りたがすぐ又、左岸を大きく700m付近まで巻き上がってしまった。その下降中に見た限りでは、ムキ沢は廊下状、以東沢はゴーロ状となっている。降り立った処はムキ沢出合から300m入った所だった。そこからカマヅカリ

沢まで沢芯を難なく着く。出合から美しい小滑滝が続き、途中でYが釜に墳まるハブニングがあったりして、釜原沢に達する。すぐ巨岩からなる5m滝を越し、更に小滝を通過して行くと無名沢出合（二服）で、本谷は90度左折しゴーロを進んでビバーク、焚火で疲れをいやしてから、眠りに付く。

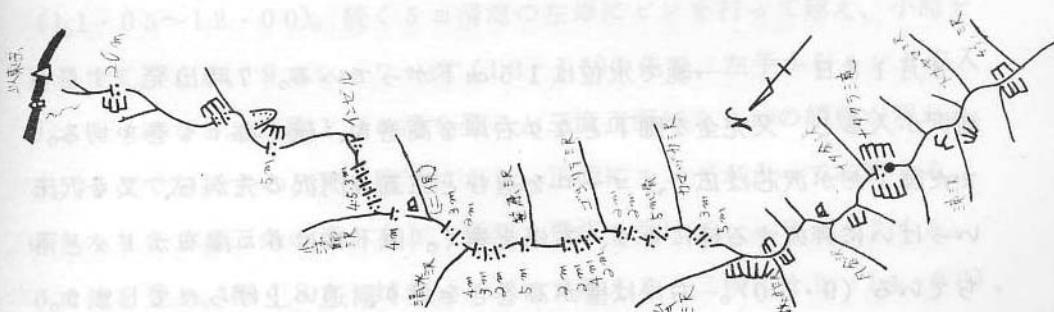
参考タイム：風倉沢（100分）数エ門沢（200分）カマズカ沢（60分）ゴジリデ沢（130分）笛原沢

8月18日 6時出発する。巨岩が階段の様に重なり、右折すると4m滝が懸かり右岸を越せば、すぐ小法師沢出合になる。しかし早朝から泳ぐ気はせず、深淵は右岸を巻き、小法師沢を越えてから下る。続いて4・5・3・2・1mの滝は総て左岸を越すとゴーロになり、すぐの左折点にはインゼルがあって、その右は20mの滝状となっていた。途中5m滝を通過して、いよいよ最後の20m滝を快適に直登すると、稜線までもう一息。背の低い笠を抜けると、予定通り以東小屋に出た。

第1期とは違って、晴わたった稜線は本当に気持ちいい。

参考タイム： 笹原沢（120分） 小法師法（160分） 二（75分）  
20mの滝（80分） 以東小屋

## 以東沢概念図



◎ 竹ノ沢から相模沢 (メンバー 川戸秀起・苗村元)

竹之沢

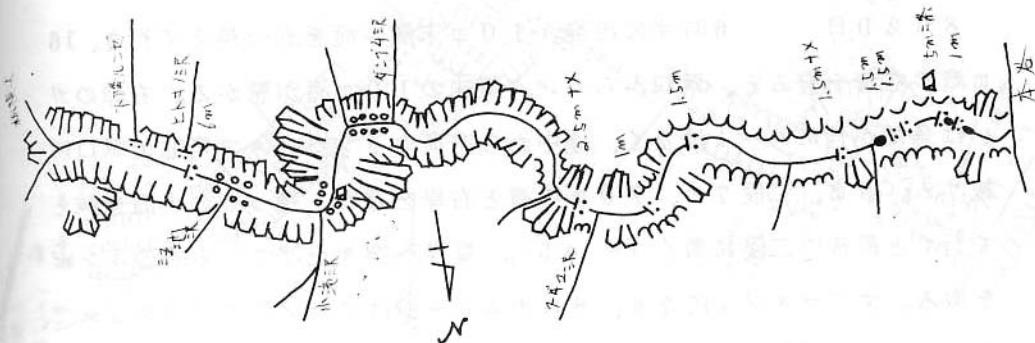
8月16日 偵察済みの廻道を辿る事3時間半で、やっと竹ノ沢出合に降りて昼食を取る。ワラジを付けて、以東沢隊の三名と別れ、いよいよ入谷する(11・45)。最初からきわどいへつりで右岸を行くと、すぐ右折して暗くなり、ハング気味の廊下は左岸を巻いて懸垂で小河原に降りる。続く淵は左岸を空荷でへつったが、大きな釜を持った二条5m滝で再び左岸の高巻に入り、ピバークにする(15・35)。まだ出合から500m程しか来て居ない。明日から頑張ろう。

8月17日 7時出発。懸垂下降後、露岸帯を腰まで浸ってへつり、1.5m滝を抜けると滝、そして又1.5m滑滝がある。次の小廊下は右岸巻き、1m滝を越えて、続く廊下は左岸を巻いて昼にする(11・50)。懸垂で下ってから、右岸順層を進み、2.5m滝を越えて緩傾な階段状の沢床を行くと、斜めの4mチムニーがあり、その左壁クラックを辛うじて登ると、先は峻崖の廊下が続く。リッジより大きく右岸を巻いてルンゼより下降し、廊下の沢芯を行くと、ダンブチ沢から砲礟化するも、左岸小ルンゼ出合から碧潭を狭んで険悪な廊下が続く。竹ノ沢の一つのポイントになる処だ。右岸を巻くなら100m下流から、左岸は100mの壁がある。我々は左岸、右岸を半分づつ辛艱の末、巻き切って河原に出た(16・10)。夜の焚火は、岩を真赤に染めていた。

8月18日 一晩で水位は15cm下がっている。7時出発。すぐ小滝沢が入ると、又完全な廊下となり右岸を高巻き、続く廊下も巻き切る。まだ廊下だが沢芯は広く、ゴーロを進むと三五エ門沢の先から、又も沢床いっぱいに奔流する様になり、右岸を巻く。眼下には6m瀑布がドッと落ちている(9・50)。右岸は壁が高巻きを遮り、追い上げられてしまう。そして、相模沢出合に懸垂下降。

ついに竹筒のような廊下との闘いは終った。午後は濡物を乾かして、明日から水量の少ない滝登りを楽しませてもらおう。本当に、文字に表わせぬ苦難と緊張の連続だった。

## 竹之沢概念図



相模沢

8月19日 6時半出発。すぐ6m滑滝が懸かり、左岸から16m二段の滝となって小相模沢が入る。次の1m滝の釜は、右岸をアブミに乗って越すと、4m滑滝の後、右折して8mシャワー滝が懸かる。更に小滝群を越して行くと、正面の大峭壁で左折し、二条20m滝と二条10m滝を共に右岸直登して小休止。後を振り返ると、まるでビルの屋上に居る様な高度感がある。先の10m滝は左岸を、樋状20m滑滝も左岸を登ると左折する。再び正面の40m程の峭壁で右折している。その右折点の30m滝は、右岸の浮石を落としながら、空荷で強引に登り、落口で屋にする(11.05~12.00)。続く5m滑滝の左岸にピンを打って越え、小滝を通過して行くと、9mシャワー滝(13.15)の先で、左手からルンゼが入りゴーロになる。二段10m滝を登ると三度正面に50mの峭壁が現われる。そこで左折すると又も廊下になり、正面にルンゼが入って右折する。いきなり12m二条の滝が有り、猛烈な飛沫を受けてシャワークライム。6m滝を登り、続く8m滝はショルダーで越えると二俣になり(14.20)、左俣本谷はすぐ左折して二段8m滝を懸けている。ピンを一本打って右岸

ハングを越え、落口にトラバースし、先の二段3m滝を登ると左折して、谷は詰めの相模山まで真っすぐ上がっている。今日はここでおかんにする(920m点)。明日はBHへ帰還出来よう。一応予備日を一日取って、残りの食糧を平らげてしまう。

8月20日 6時半に出発。10m末満の滝を五つ越えて行き、16

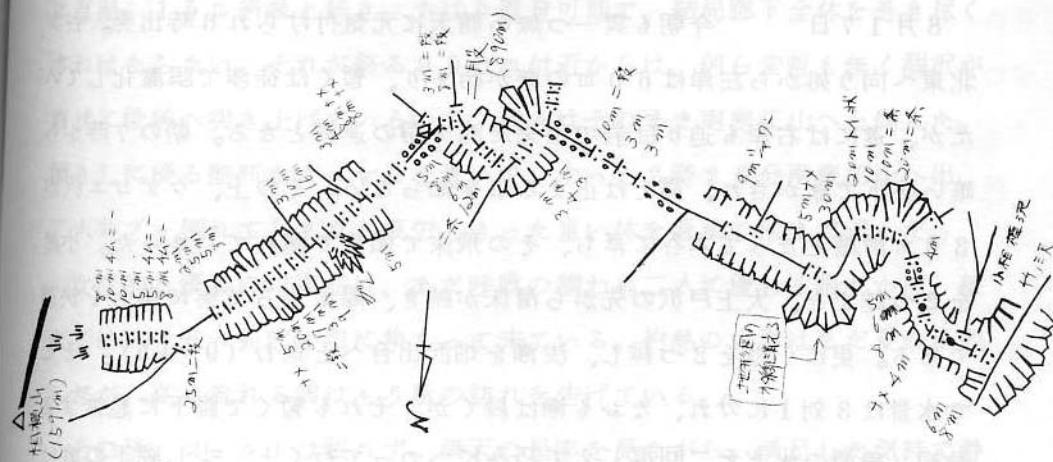
m滝の右岸を登ると、落口からハング気味の10m滝が懸かる。右岸のガレは急だが他にルートはなく、途中から空荷のトラバースで辛じて落口に抜ける。9m、二段7m、20mの滝と右岸を登り、幾つもの小滝を越えて行くと最後の二俣に着く(8・45)。夏径へ突き上げている右のルンゼを取る。すぐゴルジュになり、8mチムニー滝はワラジのフリクションで、5mチムニー滝はチムニークライムで、次の5m滝はシャワークライムで、問題なく登れたが、続く10m滝の両壁はえらく狭まり、二人がやっと通れる程である。右岩ジロンデルに何とかへばり着き、這う様に登ってから落口にトラバースする。次の10m滝もチムニーで、最初バック&フットで取付き、更にバック&ニーで登ると、いよいよ体が入らなくなってチムニーから出、チョックストーンを頼りに一気に抜ける。その上の8m滝をシャワークライムで越すと、ゴルジュはブツツリ切れてブッシュに変わる。そこで昼にし、最早無用となった三ツ道具やゼルブースト等は総てザックに仕舞い込み、軍手をして一気に稜線に抜ける(12・20)。

ああ、遂に終った。廊下で苦しめられた竹ノ沢、快適な岩登りを楽しませてくれた相模沢。千変万化しながら渓谷美を隨所に見せて、沢の醍醐味を満喫させてくれた二本の沢を後に、馬鹿尾根の夏径をベース目指して下って行った。

◎馬鹿尾根～別にこの様な名は付けられていないが、重疊と続く起伏を巻く事も知らず、忠実に尾根上に径が続いている為、一度登っただけでうんざりさせられる。我々はこの尾根を性懲も無く十数回登り下りして

来たので川戸君はこう呼んだのであろう。

## 相模沢概念図



◎ 岩井又川 (メンバー 四方立夫・松本繁文)

8月16日 通い慣れた径を本流に沿って南下する。灌木や笹は真珠の夜露を乗せ、徒渉するまでもなくニッカーはグッショリ濡れてしまう。平四郎沢出合で徒渉し、ブッシュを漕いで岩井又川に入る(8・30)。絶えず腰までの徒渉を強いられ、時間は食われそうだが溯行の見通しは明るい。「やっと」といった感じで万四郎沢に来ると岩狭も終り、多少ピッチが上がる。左折点には2m S字状滝が滑り落ちており、左岸を泳いでから越す。相変らず沢相は穏やかで、雲一つない灼熱の太陽と、まだ見ぬ夢の源流部に端を発し流れる水の冷たさは共に快い。ガッコ沢先に垂壁が堰の様に左岸から二つ張り出している。一つ目は越せたが、二つ目は出口草付が悪く、右岸ルンゼから巻くことにし、まず腹ごしらえ(11・30)。高巻後、左岸通しに進むと2m滝を持つ小廊下があるが、左岸を難無く通過。水上沢出合から幅50m程の浅瀬となり、大上戸山を望むとすぐ4m瀑布が懸か

るが、巨岩を登るとそのまま落口に出る。ワカバ沢出合左岸の砂地に荷を置く（15・00）。全く予想外、一日で5Km余も前進出来ようとは。

8月17日 今朝も雲一つ無い晴天に元気付けられ6時出発。谷が北東へ向う処から左岸は60mの壁が始まり、暫くは徒渉で誤魔化していたが、遂には右岸も迫り巨岩で出来た滝や瀧の連続となる。朝の7時から暗い廊下で泳がされ、震えは止まる事を知らない。その上、ウデゴエ沢が30m滑滝となって本谷に落ち、その飛沫で頭まで濡れてしまった。小滝を2つ越すと、大上戸沢の先から滑床が続き、陽も当って実に美しく快適である。更に小滝を2つ越し、浅瀬を畠沢出合へと進む（9・45）。そこで水量は3対1に分れ、なおも瀬は続くが、それも暫くで廊下に急変する。最初、碧潭の泳ぎを二回混じえて巧みにへつって行くと、少し廊下の底は広くなり、30m階段状滝となって西俣沢が入り、昼にする（11・00～11・45）。すぐ右折左折して、再び狭まり、暫くは沢床を頑張って見たが、廊下特有の蛇行が始まり、深淵が続く。泳ぐにしても空荷のクロールでなければ突破出来そうも無い。仕方無く左岸を巻き、一度思い切って沢床に懸垂下降したが、すぐ又藪まで追げられてしまった。が目と鼻の先に滝オシリのガッコ沢が寒江山へ突き上げている。上下左右総スラブで、ルンゼは本谷以上の急傾斜、エスケープ出来そうな処は全く見当らず、僅かな鉄と地下足袋ではとても抜け切れそうにない。滝登りを期待して来ただけに二人共意気消沈。仕方無くそのまま大きく巻いて中ノ俣沢に入ってピパーク。ゆっくり焚火で濡物を乾かし、話題に花を咲かせて、一番星、二番星と出始めた頃ワラジを水に漬けて、ツェルトに潜り込んだ。

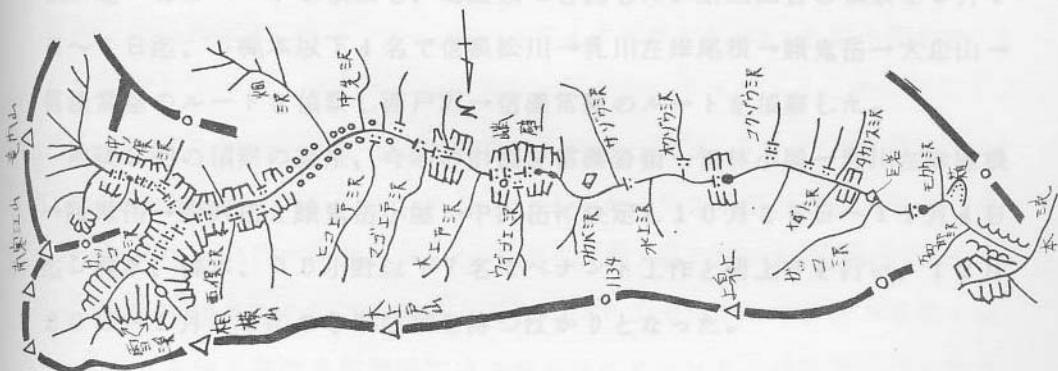
8月18日 ピパーク点は700m。6時出発。大きく左曲する途中に、2m滝が二つ共に廊下いっぱいの釜を持ち、今朝は全く泳ぐ気がせず右岸を小さく巻く。次の右折点（7・00）には10m斜瀑が懸かり、左岸を登ると形の良い15m直瀑が碧空に落ち、その落口も深い釜となって、

下からでは左折している為飛沫だけが望める15m瀑布があり、再び右岸の高巻に入る。極度に狭い廊下・小滝・深淵が執拗に続き、800m点の右岸ルンゼ出合手前100m程は磈礪状だが、出合には深い釜を持った20m直瀑、15m斜瀑と続き、やはり直登可能で、結局廊下全体を巻き尽くさねばならない。それが終る900m付近からは、何ら変哲も無く涸沢が扇状に稜線へ突き上げているので、我々はそのまま南寒江山へと向った。聞きしに優る酷烈なブッシュを漕いで、やっと2時20分南寒江山へ出、二人共ブッ倒れてしまう。疲労しきった重い体を源蔵の池まで運んだ。

女性的な優姿の以東岳は、まだ呼吸の調わぬ二人に優しく語りかけ、縦走者は三々五々狐穴小屋に集まって来ている。杓熱の太陽はまだ夏の日差しだが、高く流れる雲はもう秋の訪れを告げている。

その後、ツェルトは張れず、満天の星座を見ながら、満足した気持で静かに寝入った。

## 岩井又川概念図



## 《あとがき》

大阪では資料集収出来なかったが、現地での情報等で、以東沢・竹之沢・金堀沢・相模沢・岩井又川は既登である事が判っている。（峡彩山岳会・長井山岳会・新潟渓雪登高会・福島大AC・伊藤敏氏）従って計画の主旨であったはずの初登攀で無くなってしまった。これは私の不勉強の所為であり、余りに幼稚な発想であったと思う。（今日日未登の大きな沢など有りやしない。）

最後に、本合宿で得た物は、黒部とは趣を異にした沢で成功を修めた事以上に、一貫の判断で巻かずに、躊躇なく碧潭に飛込み側壁に取付く。この剥出しの、泥くさい溯行の基調となったのは「沢芯の解明をしてやる」という、強い精神であった。これから溯行は、この気持で臨みたい。そしてそれを精神的にバックアップしてくれるのが、ラーブハーケンとボルトの持参である。（これらを使用する溯行の必要性は余り感じないが。）

従って、上品な溯行をしたい者は、穂高・剣に入って他人の打ったビトンやボルトにぶらさがっていれば良いと思う。敢えて、沢を目差さずとも。

